

■今日に生きる秋岡氏の教え

置戸町山村文化資源保存伝習施設どま工房建設の話が持ち上がったのは、オケクラフト誕生から10年目を迎えた平成4年のことでした。前年にクラフトパーク計画策定委員会が発足し、計画実施に際してのキーパーソンとして期待を集めていた秋岡氏が、「生活学博物館」を建て、言わば「モノの図書館」として機能させることができるのなら、自らが収集してきた生活工芸資料を置戸に提供してもよいと明言したことに由来します。



その昔、雨や雪などで仕事のできない時や夜なべの仕事場として、または近所同士で気軽にお茶などを飲みながら語り合う場として、どこの家にも設けられていた「どま」。そんなところから暮らしや生産のための知恵、技が受け継がれてきたと言われています。平成7年にオープンしたどま工房には、かつての土間のような交流の場から、農林業で栄えてきた置戸の中に生き続けていたり、消え去ろうとしている知恵や技を再生し、新たな生活文化を創り出していこうという、秋岡氏の願いが込められています。また、秋岡氏は収集した資料の移転理由について「置戸は湿気が少ないうえにシロアリもない、そして、何より地震の心配がないから…」と、生前笑いながら話していたそうですが、本当はもっと深い意味があったのだろうと感じずにはられません。

秋岡氏と共に、オケクラフトの作り手養成や手

仕事の精神を伝えてきた時松辰夫氏（大分県由布市在住）は、『日本の手仕事道具－秋岡コレクション』第10巻の発刊にあたり、次のように寄稿しています。

「昭和40年代、日本の工業デザイナーの草分けである秋岡先生は、日本が工業化社会へ急速な発展を遂げる一方で、手の触覚を通して五感に秘められた職人の熟練技が非効率に見られ、失われてゆく日本の手仕事文化の行く末に強い危機感を持たれました。とりわけ、木を素材とした地方の地場産業で培われてきた工芸技術の衰退を憂い、技術を記録保全するために散逸する道具を丹念に集めました。手による生産技術の復活に役立てたいと、沖縄から北海道まで精力的に講演と巡回指導を行いながら、亡くなる三ヶ月前まで地方の職人たちを励まし続けました。手仕事の復権に生涯をかけた膨大な研究資料や著書は、広く活用されることを望み、社会教育活動が盛んな置戸町に寄贈されました。資料が町民に身近なところで役立つよう、学習の場として「どま工房」を設計し、道具と生産と生活の関係を楽しく学び、社会教育から産業へとつながる「どま塾遊学工房」を開校しました。これからの地域社会の再生と自立への画期的なデザインを残してくれています。」

“ドマ”はう。

あそんで
なろう
よじわっ

（秋岡氏の残した言葉）

ブックレット『日本の手仕事道具－秋岡コレクション』好評発売中です



お取り寄せ等の詳細は森林工芸館 ☎52-3170へ

ブックレット『日本の手仕事道具－秋岡コレクション』は、6,500点ほどある手仕事道具や生活道具を検索し易いようにファイル化したデータベースを基に、種類別に冊子化したものです。全ての資料を紹介するには30集ほどのシリーズになるものと思われます。発刊順序は大工道具等の「製作のための道具」、「生業のための道具」、「秋岡作品」、「その他、名称・用途不明」という順を予定していますのでお楽しみにお待ちください。